

## 『内藤湖南全集』に未収録の資料について

ジョシュア・フォーゲル\*

私が内藤湖南について博士論文の研究を始めようとしていた頃、彼の有名な本や論文をとともゆっくりと、時には先生の手助けを借りて読み始めました。そして私は1970年代後半日本へ旅立ち、京都にある有名な朋友書店にて『内藤湖南全集』を購入しました。14巻ある全集に目を通していると、第14巻にとっても価値のある内藤の本、小論文、新聞記事、評論、他の学者の著書の序説を含む全ての書物が年代順に掲載されているのを発見しました。前述の書物掲載欄にはそれぞれに巻名が示されており、読み手がそれらを全集の中に探し当てる事が出来るようになっていました。私は直ぐに、特に初期の年代に至っては、時々巻名が示されるであろう項目に空白のスペースがあるという真実に気がきました。最初、それらの記事や論文は1つ上に掲載されているものと同じ巻にみつけられるという意味だと思っていました。ところが調べてみたところ、そうではないことがわかりました。すると彼らが主張している〈全〉は、一般的に言う〈全集〉のような意味ではないのではないか……と、仏教の悟りのように突然分かり始めてきたのです。もしそうだとしたら、もし『内藤湖南全集』が完結なものでないとしたなら、(a) 何故編集者が著作集ではなくて全集と呼んだのでしょうか。そして、(b) 何故第14巻にそれが“完全”なものではないと明確になるような掲載の仕方をしたのでしょうか。

1970年代後半にはもちろん、インターネットやオンライン図書カタログはありませんでした。全ては鉛筆、紙、カード・カタログの時代でした。いくつかの参考になる仕事を通して、『内藤湖南全集』に載せられなかった多くの記事を所有するいくつかの図書館を日本に探し出す事が出来ました。そして司書に手紙を書きそのコピーを依頼しました。代金の支払いには、大抵総額分の郵便切手を送っていました。今となっては原始的で煩わしいことのように思えますが、それはデジタル時代到来以前の出来事でした。私はそれでも尚、出版されてはいますが全集に掲載されていない論文を大量に収集する事が出来ました。そしてそれを博士論文と、自著の*Politics and Sinology: The Case of Naitō Konan (1866-1934)* (和訳：『内藤湖南、ポリティックスとシノロジー』井上裕正翻訳) の中で使いました。

なぜこれらの特定された書物が全集に掲載されなかったのかについてはどうしても分かりませんでした。私が日本に滞在していた1970年代後半、私は嘗て内藤の生徒だったという、宮崎

---

\* ヨーク大学教授 関西大学ICIS・COE客員教授

市定や三田村泰助など数人にインタビューする機会がありました。そして中国学者になった内藤の2人の息子である内藤戊申、内藤乾吉にもインタビューをしたいと思っていました。京都大学の私の指導教官である竹内実先生を通して、次男にあたる内藤戊申に会いました。でも乾吉に紹介してもらう機会は、吉川幸次郎に会い、長くて非常に興味深いインタビューをするまでありませんでした。私は即座に乾吉先生に手紙を書きました。でも彼は丁度その週に亡くなってしまいました。『内藤湖南全集』の編集者の一人で父の仕事を誰よりも知っていた乾吉が亡くなったことは特に悲惨な事でした。その数年後に亡くなった、もう一人の編集者である神田喜一郎には結局会うことは出来ませんでした。私の疑問に答えてくれたであろう内藤乾吉と神田喜一郎この2人の欠乏によって、何故多くの内藤湖南の書物が全集に掲載されずに残ってしまったのかということについては、私の最高の推測をするしかありませんでした。

それではこれらの記事がいくつあったと思われますか？1970年代後半、私は105の論文と記事のコピーを得ることができました。長いものも短いものもあり、いくつかには内藤湖南、内藤、湖南、内藤虎次郎など見覚えのあるサインがされており、他には見分けのつかないような黒頭、落人後子などの筆署名、又は頻繁に使われていた潜夫というペンネームが書いてありました。それに付け加えてサインはありませんが、内藤による68の論文、記事なども得ることが出来ました。『内藤湖南全集』の編集者が第14巻にこれらの記事を掲載していなかったとしたら、ペンネームや匿名からでは内藤が著者だということを突き止めることは出来なかったと思います。これら意外にも、私が探し出す事さえ出来なかった書物もありました。

今日は、少し時間を頂いてこれらの全集に含まれなかった資料からの質問を提示させていただきたいと思います。これらの論文をどのように特徴付けることができると考えられますか？なぜこれらが全集から外されたのでしょうか。そして潜夫のような内藤湖南のペンネームの持つ意味は何なのでしょう。もう少し一般的に言うと、有名学者の全集に掲載されなかった資料があるという事実はどのくらいの割合で起こることでしょうか。そしてもしこういうことが頻繁に起こっているのだとすれば、全集という言葉の持つ意味は単にマーケティングのための策略に過ぎないのでしょうか、又は本来もつ意味の他にも何か別の意味があるのでしょうか。

『内藤湖南全集』に掲載されていないこれらの論文が初めて出版された時代に注目してみると、私の最初の仮説はこれらが内藤がまだよく知られていない初期の頃のものではないかということです。しかしそうではなくて、それは彼の生涯に及んでいたのです。1番早いものは彼が21歳の時で『明教新誌』という雑誌に載っており、1番最後に書かれたものは、亡くなる寸前の出版物でした。特に初期の年代に多くありましたが、全集に掲載されなかった論文はどの時代にもそしてほとんどの年にありました。おもしろいことに、サッと目を通して見ると全てのサイン無しの論文は内藤が頻繁に書いていたいくつかの定期刊行物に1880年代、1890年代に出版されています。しかしサインをした論文に関しては、幅広い年代に渡って出版されていますが、どういう訳だか1890年代に少し多く見受けられます。全集に掲載されなかった論文

は、内藤の生涯における特定時期に集中されてはいません。題名に関していうと、論文は幅広い分野に関して書かれています。あるものは現代事情であり、他のものは非常に難解で学術的なものであったりします。これらは内藤の他の論文と比べると同じような特質を持っています。それは長期的、学術的見解を使って現代事象についての政治的、文化的視野を高め、学問と現代政治の視野とを合わせるということです。なのでこれらの多くの論文を特徴付ける簡単な方法はないということになります。

これらの初期の論文のいくつかは、1889年と1890年の『大同新報』に載せた、単に「時事」と題されたサイン無しのニュース記事でした。似たようなものでは、内藤の書いた文化的、文学的に焦点を置いたものでしたが、いつも日本についてでした。彼が中国時事に全注目を注いだのは1890年代後半になってからでした。1887年12月と1888年1月の2回に渡って『明教新誌』に出版した彼の最初の論文は、「宗教家と教育学」と題されていました。『明教新誌』は凶暴な攻撃下にあった明治中期の仏教を守るために忠誠な政治誌で、東京の大内青巒によって編集されました。三田村泰助が内藤の伝記に記したように、この書物は飛びぬけて興味深い訳でもなく、よく書かれている訳でもありませんでした。それがもしかすると、全集に取り入れられなかったことを理由付けるのかもしれませんが。しかし1888年初期、内藤は「明治二十一年來たれり」という物を書き、それが青巒の目や『明治新誌』読者の目に多いにとまりました。それは仏教を守るもので、彼は明治期の好細君と表現しました。この書物は『内藤湖南全集』に掲載されています。私が推測するに、『内藤湖南全集』の編集者達は、彼の優れた書物を厳選することによって彼の評価を守ろうと努力していたのではないかと思います。しかしそうすると、また私の先の疑問に戻されてしまいます。もしそうだとしたら、(a) なぜ全集と呼んだのか、(b) なぜ第14巻に掲載したのか。

1888年1月中旬、青巒は21歳の内藤湖南を新しい刊行物『萬報一覽』の編集者にしました。この雑誌に書いた彼の最初の3つの論文は全てが「時事評論」と題され、『内藤湖南全集』からは外れています。ただそれは珍しい内容でも攻撃的なものでもありません。翌年、青巒は内藤をもう1つの新刊行物、『大同新報』の編集者にし、かれは大量にこの雑誌に書きました。これらのいくつかの論文は全集には載っていません。これらのいくつかは非常に政治的なもの、あるいは評論、そしていくつかは文化的なものでした。長い話を短くしていうと、なぜこれらの論文が『内藤湖南全集』に合う論文だと見られなかったのかという理由がまだ見つかりません。

数年が過ぎ、内藤は引き続き日本の報道、特に『大阪朝日新聞』に書き続けました。京都大学や他地域にいる彼の同僚達と違って、内藤は多くの機会に新聞や週間雑誌に話題の記事を書きました。時にこれらの論文は外国政治家や外国政府にとっても批判的だったかもしれませんが。しかし、内藤は時には日本や日本政府に対しても同じように酷く批判的だったと付け加えた方がいいでしょう。戦前の中国批判に対する戦後の日本人の感受性が、『内藤湖南全集』の編集

者に中国を非難するいくつかの痛烈な書物を無視することを働きかけたかもしれません。これには『太陽』というとても人気が高く名声のある雑誌の1919年6月号に掲載された、「支那の亡兆」と名づけられた4ページに渡る論文が含まれます。彼はこの時期、中国での反儒教の学生運動に対して（多分過激な言語ではなく）似たような攻撃をしましたが、新文化運動や五四運動を本当には理解していませんでした。彼にはどうして若い中国人が彼らを作り上げた偉大な儒教遺産を拒否するのか、又西洋異国の文化的な装飾を選択するだけにとどまらず、どうして自分達の文化的伝統や同類の日本人を不徳に攻撃するのか、さっぱり意味が分かりませんでした。2004年から全世界に多数見受けられる中華人民共和国政府援助の孔子学院の発展からみると、彼は正しかったのかもしれません。面白いのはほんの数年後、内藤が「支那に還れ」と題された長くて激高させるような論文と、1926年に「新支那論」と題された短いパンフレットを出版したことです。これらはどちらも全集に掲載されています。

ここで、内藤の中国に対する強い批判が全集から除外する事への基準ではなかったと議論したいと思います。戦後直後、日本戦争における戦前日本人シノロジストの共謀についての討論はこの時期とても白熱しました。学者の戦前シノロジストの戦争への直接的な助成や、基本的な帝国主義の論文や本を執筆することはどちらも非難されました。1946年から内藤の多くの考えは中国本土における日本帝国主義を支援するのに見直されました。彼の中国の文化が年月とともに西から東へと（西安から洛陽、そして開封等）、そして北から南（最終的には揚子江地帯、そして遠く広東）へ移るという文化中心移動説は、中国の、又は東アジアの文化は直ぐに海を越えて遠くへ移動し日本に到着すると提案しているかのように見られました。彼の多くの考えは全て信憑性がない、中国を批判する遠隔の考えでさえぬぐい取りたいと思っている激左翼の学者によって言いふらされました。

これは1960年代、1970年代に「内藤湖南全集」の準備をしていた内藤乾吉と神田喜一郎の編集の仕事への動機付けにはならなかったと明確に言えます。しかし、この一般的なトレンドに少しも影響されなかったというのなら驚きます。もし著名な雑誌『太陽』に載ったとしても、無害で短い論文の「支那の亡兆」などは無視できますが、「新支那論」は内藤の全書物への重要性から見落とす事は出来ません。彼の「支那に還れ」はまた別の話であって、なぜ「支那の亡兆」が掲載されずに、これが全集に載せられたのか説明をするための良い理由をまだ考えられずにあります。

内藤の書いた他の2つの論文について触れておきたいと思います。それらはどちらも彼の名前で書かれており過敏な事柄を扱った堅い文章で中国に対してとても批判的なものでした。「山東問題と排日論の根柢」と題されたその1つは、五四運動が起こったわずか数週間後の1919年7月、『太陽』に掲載されました。

それは愚行な反日運動を非難し、中国の崩御を予言しました。しかし内藤は、これは中国人にとってはそんなに悲観的な出来事ではないと急いで付け加えました。なぜなら中国の「天才

や文化」は発展し続けると思われたからです。関連した論文が約3年後に『表現』という雑誌に掲載されました。「梁啓超氏の非國際管理論を評す」と題され、梁啓超の思考に対して鋭く非難するものでした。内藤は梁啓超を学者として特に好む事は決してありませんでした。そして他国に支配される中国に対抗する梁の政治的思考を鋭く攻撃し、自身はその考えを受け入れたように見えました。

もう一方では内藤はかなりの数の全集からは除外されている学術的な論文を書いています。これらは論争的なものではなかったので除外された事に対する理由は別にあるのでしょう。これらの中には「聖徳太子の内治外交」（1918）、「富永仲基の仏教研究法」（1924）、「歴史の起源に就いて」（1915）、「史記の事ども」（1915）などと題されたものがあります。事実、これらの論文をグループとして見分けると何かというと、全然政治的ではありません。しかし、なぜ『内藤湖南全集』から除外されたのかということはミステリーなであります。それは学術的性質に欠けているからなのではないでしょうか？でもそれは、内藤の他の著書と同等であるからして、そのような結論は正当ではないように思われます。それらは水準以下とか信用のない雑誌に出版されたのでしょうか？いや、他の論文と同じように『歴史と地理』、『龍谷大学論叢』、『東洋美術』などの学術的なものに掲載されています。学術的だが短い論文などは、『大阪朝日新聞』、『中外日報』、『大阪毎日新聞』に掲載されています。結局はまだ何の説明もできないままです。

それではこれらの論文に使われた不透明なペンネーム、著者が一体誰なのか全く検討もつかない名前について少し考えてみましょう。既にいくつかは紹介していますが、彼が若い時に選んだ名前はまだ本当の名前が一般に知られてなく、蓄積された古典的な知識を誇りに思う若い天才男性の作品であるということは明確であります。それを尊大だと思える人もいかもしれません。1889年（彼が23歳の時）に新しい仏教徒出版物を祝うために『大同新報』に書いた短い論文に、彼の名前を欣求生（ごんぐしょう）とサインしていることは、彼が仏教言語に精通していることを示しています。1895年に『太陽』のための最初の記事を出版しています。北京の歴史について書いたとても学術的なもので臥遊生（がゆうせい）とサインしていることは空想旅行が好きだという事を示し、なぜならこれは彼が台湾や中国圏に初めて旅行する前のものだからです。1890年代初期に彼が2回使ったことのある名前は落人後子（おちゅうど・こうし）で『日本人』、『亜細亜』という雑誌でそれぞれ1回ずつ使われました。このようなケースでは1868年以降の政府を支配した薩摩・長州や他の藩からではない明治維新時代の活動家の運命に漠然と照会させていたのかもしれない。

もう1つのペンネームで特に興味をそそるのは潜夫です。彼はこの名前を使って『内藤湖南全集』に載らなかった36の論文に著名をしています。これらは1898年から1900年の2年間に『萬朝報』のために書かれた新聞記事です。名前の意味は簡単に言うと世界から隠れ、世界を拒否する者という意味です。唐時代の偉大な詩人である杜甫の詩や韓愈の論文・書物の中に出てき

ます。又、宋、元、明、清時代の数え切れないほどの中国の詩人や文人によってペンネームとして使われました。これらのペンネームを使った人は中国の文化的歴史から14人以上探し出す事が出来ました。しかしながら宋時代以前、又は唐時代以前にさえその名前を使ったもっと重要な人物がいて、それが内藤のこのペンネームの扱い方の原典になったのかもしれませんが。『潜夫論』10巻は後漢時代に王符（78年頃-163年頃）によって書かれたものです。暴動の時期に生き、王符は時代の困難さと混乱に巻き込まれるのを拒否し、彼の周りに見られる政治社会の低下の中にしっかりと立ち向かいました。彼は比類のないほど荒々しい決意をもった儒教政府の良い方向への転換を支持しました。社会的、政治的汚職の堅実な批評家でしたが、彼自身の名前を文面に書くことは気がかりではありませんでした。そのためこの題名を選びました。

内藤は同じ名前を似たような理由のために選びました。彼もまた困難で騒然とした時代に生きていたと感じ、明治時代の政治的、社会的に数え切れないほどの濫用に批判的で、（彼の生涯のこんな早い時期に）政府に彼がどんな人なのか、潜在的に又、彼の生活のためにマーキングして欲しいとは願ってはいませんでした。内藤にとっての危険度は、多分何世紀も前に王符に潜在的に立ち向かっていたのと比べるとかなり低かったでしょう。しかし内藤は自分を著名な先祖としかも中国人と、共同化させることが好きだったのです。彼が潜夫というペンネームを使うのは、内藤が中国学研究に移入していく時期と重なり、それはジャーナリズムの世界から学術的な世界へ移行してから10年もたっていませんでした。

つまり要約すると、『内藤湖南全集』から外れてしまった論文について、又彼が使った沢山のペンネームについては言う事が出来ますが、なぜ全集に取り入れられなかったのかという包括的な質問については答えることが出来ません。政治的な敏感さ内容の欠乏等の明確な理由はいくつかの論文には当てはまりますが、同じように政治的敏感さ、内容の欠乏がある他のものが全集に取り入れられているので、それだけでは全集に掲載される理由にはなりません。という訳で、どんな提案でもいいですし、コメントや批判も受け付けたいと思います。